

【開催概要】

研究会「琉球・薩摩と東アジア——人と文物の往還——」
二〇一四年一月三十一日（金）午後六時半～午後九時
立教大学 池袋キャンパス 十六号館 第一会議室

小峯和明（立教大学名誉教授）

木村淳也（明治大学兼任講師）

鏑 武彦（神戸女学院大学非常勤講師）

鈴木 彰（立教大学教授）

島村幸一（立正大学教授）※コメンテーター

【発表要旨】

東アジアから袋中の琉球言説を読む

小峯和明

浄土宗の学僧袋中は、一六〇三年から三年間、琉球に滞在し、日本に戻ってから『琉球神道記』と『琉球往来』の二著を述作する。一六〇九年に薩摩藩が琉球を侵略するおおきな変動期の前夜であり、とりわけ『琉球神道記』は当時の社会情勢や民俗にまで筆が及び、古琉球の最後の光芒を伝える第一級の資料として琉球でも高く評価される。しかしながら、従来の研究は琉球に関する巻四や巻五にふれるばかりで、巻一から巻三までの天竺や中国世界ほとんどは無視されてきた。ここでは巻一から三までも対象にしてその意義を追究し、既成の三国観の日本を琉球に置

き換えた擬三国観をさぐり、日本と琉球の一对一对応にとどまらない東アジアの見地に立つて読み直すべきことを主張した。

さらには、『琉球神道記』に比べて再評価の遅れた『琉球往来』が東アジア世界から読み込みうる可能性に富むテキストであることを提起し、他の袋中の著述にみえるルソンとのかかわりなどにも考察を加えた。また、『琉球国由来記』にみる東アジアや『朝鮮王朝実録』に見出せる秀吉の朝鮮侵略と薩摩の琉球侵略との連動についても言及し、東アジアからあらたにとらえ返す多角的な視座についての提言を試みた。

重奏し変奏する琉球の航海神——東アジア世界との関わりから——

木村淳也

琉球王府時代の航海神の信仰について考えると、意外なほど弁財天が重要視されていることに気がつく。弁財天は王府の祭祀を中心に崇拝され、明治期には、御嶽の神さえも弁財天と理解されてゆくといい事態が起こっている。琉球における弁財天は、おそらく日本から権現信仰とともに将来されたと考えることに蓋然性があるが、その信仰自体は十七世紀に入ってから急激に受容された、と先行論では説かれている。しかし、その急激な受容の背景にどのような経緯があったのかは詳らかにされてはいない。

琉球関係テキストを丁寧にもとくと、十七世紀初頭を画期として、王府内に弁財天を「琉球の守護神」として在来の信仰に関連づけ、上書きするような思考の変化がみえる。そしてそれが決定的になるのは十七世紀半ばあたりだが、この時代は近世琉球期への転換点としても理解されている。であるならば、弁財天信仰の興隆と浸透とは、薩摩支配下に

置かれた王府の意識変化や、宗教界、とくに琉球真言宗の活動と連動するものと言えるのではないか。本発表では、先行論ではあまり言及がなかった薩摩との関係を視野に入れ、琉球における弁財天信仰の消長を考えてみたい。

鈴木 彰

琉球使節による和歌の詠作——読谷山王子朝恒の例を中心に——

鏑 武彦

近世の琉球では、文化人たちの教養の一つとして、和歌の詠作が行われていた。当時、琉球王国は薩摩藩の支配下に置かれており、日本の本土との間で公私にわたる人的交流があったが、歌謡や琉歌など琉球独自の文学が隆盛した一方で和文学も享受されており、人々は和語を駆使して様々な作品を残した。このうち、特に和歌に優れた者として、明和元年（一七六四）、第十代將軍徳川家治の將軍就任に際する慶賀正使として江戸参府を行った、読谷山王子朝恒（一七四五〜一八一）の名が知られる。朝恒は、琉球王国第十三代国王・尚敬王の二男・尚和で、読谷山王子と号した（後に朝憲と改名）。その江戸上りの時に詠まれた和歌が、琉球物刊本『三国通覧図説』『琉球談』『中山聘使略』等に収載されて衆目を集めた。これらの資料によって確認される二十首余りの朝恒詠は、肥前国松浦での詠作に始まり、そこから江戸へ上り、帰路京に至る道順に従って配列されているが、資料により歌数が違っていたり、歌が入れ替わっていたりする。本発表では、まずは各資料における配列を比較検討し、その詠作内容や表現技巧にも留意しつつ、朝恒が和歌の調べに乗せて詠じた思いを読み取ることで、琉球使節として和歌を詠むというこの意義を考察した。

薩摩海域の龍宮伝承——中近世移行期における薩摩の文化環境——

琉球とヤマト、中国と日本、琉球と中国、琉球と朝鮮といった比較の構図を設定することでこぼれ落ちてしまうものがある。薩摩はそうした存在の一典型ではないか。

日本国内各地から東アジアの各地へと続いていた人、文物、〈知〉が往還する環境の実態を、薩摩（島津氏領国）からの視線で眺めてみることも必要であろう。薩摩という地域の歴史的、地理的条件や伝来資料の事情などに鑑みても、その意義は小さくないように思われる。それは、他地域との関係史のなかに当該地域を位置づけ、そこに成り立つ文化環境をより大きな多面的集合体として照らし出すことを意図した、外向きの地域研究として構想すべきものである。

右のような展望と問題意識のもと、本発表では、中近世移行期の島津氏領国で生きた人々が書き留めた龍宮伝承のいくつかを取りあげ、まずはそれぞれの特質を検討した。そのうえで、当該期の島津氏の領国文化を特徴づける一側面、とくに幸若舞の受容と再生にかかわって、ひとつの問題提起を試みた。